

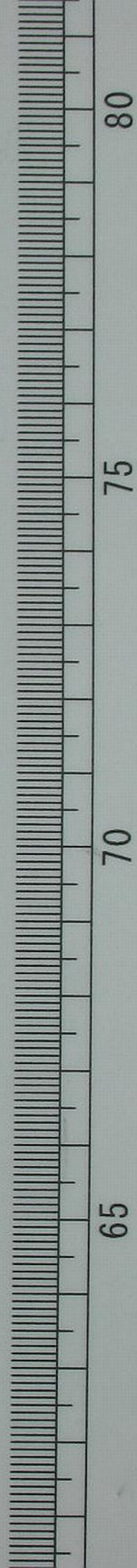


俗通

渡邊義方編輯
日本小史

第九編

上



65

70

75

80

A557
17

杂崎延房檢閱
渡邊文京操觚

梅堂國政畫

通 俗
日本小史

東京書肆

金松堂發兌

日本小史
百六
天地
百六
百六



日本小史
九
百六

48-8448



櫻井の驛
 正成正行の遺訓を
 まさかまさか
 正成正行の遺訓を
 遺訓を



正成戦死
 の前夜
 義貞と
 訣飲ま

日本小史
 九編上

三



日本小史
 九編上

三

卷之上

正義賊將赤松則村の白旗城を攻る不起り全敗の賊を先づ討ち、炎再び燃え尊氏大挙して西国より進撃の鋒先鋭く官軍遂に利を失ひ正成湊川に戦死の條に終る

卷之下



正成既して歿し、義貞敗兵を收めて京師に入り主上賊の猛勢を避んと再び山門へ行幸、何より假し賊の和議を容れ、義貞春宮を奉じて北国へ落る不終る

通日本小史第九編卷之上

東京

深崎延房檢閲
渡邊文京操觚

去程より義貞の病氣も既に全快せしむるに、五萬餘騎の勢を引率し西尊氏を討せんと、頃て京師と立たせしむ。播磨の國賀古河に至る頃、及宇都宮公綱、菊池武季等三千餘騎を率ゐて来り會し、其他所々より馳集まり、程なく六萬餘騎よりなり、去るに赤松が城へ寄て責むべしとて、白旗の城間近く押寄し、此時城壁未

成老城將赤松則村詐りて義貞と書と贈りて曰く
臣不肖の身を以て元弘の初め衆に先だち義旗と翻
がへし數々強賊を責退せけりおと恐くも當時拔群
の功業あるに豈圖らん恩賞の地降虜の下に出づそ
が一旦の怨望に依りて尊氏に服従せしも豈臣が本
志あらんや所詮當國の守護職をば倫旨に御辞狀
を添て下し賜を候り元の如く王事に勤めべく候
と言越り義貞おをを聞て大ひに喜び京師に使者
を馳て為し詔旨を乞ふ其使節往返の間十余日と過

ける間も城壁既も成る則村詔書と還付て又叛く義
貞大ひに悲り欺りたるを口惜けれ如何に此城
を責落し彼が肉と食をせや止むべきとて六万余騎
と合しと白旗の城を十重北重に取囲と五十余日
間晝夜と分たむいとを烈しく攻たりとを恠りけれ
ども此城後山と帯び前も數千仞の谷と擁し四方
皆嶮岨より要害殊に嚴しき上武器糧食も充分貯
ちたるを責せどく陥ざりしを義助義貞に説て去
るやう嚮し楠氏金剛山の城に據りし時北條氏天下

の兵と拳げて攻めど抜を撃ども挫けど力と一城の
 竭して天下を失ふ所顧を阿兄盡を監とざる聞処
 依を尊氏已る九國と併せ勢ひ成合せ東上を
 由勇々しき大事は候らむや彼尊氏が近づくぬ
 間空しく兵を分ちる此城の押へとまゝ而して急
 舟坂を抜き山陽道と徇ふべしと道理逼たる義助
 が夫の建策を義貞も此議尤も然るべしと義助と將
 と二万余騎を以て舟坂山へと向せらる抑此舟
 坂山と云るは山陽道第一の難所にして左右を我々

たる嶮山絶壁雲と凌ぎて天涯は嶺へ中よ一條の細
 徑ののみ苔蒸し石滑うまゝ山又山の九十九折
 羊の腸を踏で登ると二十余町雲霧窳渾足下は起り
 身は雲上を在りと疑ぐ如し一夫怒て関を臨めば
 萬侶も通ると得難かるぞ況てや岩石と穿ちる小
 橋と架し大木と倒して逆茂木も立すれを假令百万
 の強兵あつとも容易に攻破るべしとい見えざりけ
 る去ば然も勇あつ官軍の林麓も磬へて進み得る徒に
 山と向上て空しく時日と過りたる初ら尊氏の關を

犯まや山陽の將士争そつる賊も應を獨り兒嶋高德
 節と守りて屈せむ孤軍を以て福山の城を攻め數度
 の合戦利を失ひ従ふ所の兵士等多く叛きて賊も降
 る高德遺憾遣方なく晝寐ね夜歩き辛くして山林
 逃匿れ如何で會誓の耻と雪ぐんと義貞の下向を待
 て在しが官軍の舟坂山を起えかぬると聞き潛り使
 者と馳て義助が許し云越やう高德来る十八日を期
 し熊山よ於て義兵と拳べく左まれば船坂を堅めと
 る兇徒等定めく熊山へ寄来るや必せり敵兵の透と

る隙と得て公の兵と二手よ分られ一軍を船坂へ向
 へし一軍を三石山の南なる間道より潛り廻り
 て三石の西へ出で前後よりして夾撃せば戦ひ克む
 とりふあくとふしと謀ト合まる軍旅の進退此時に當
 りて九州一田拳川を賊も應ト案内と通むるの絶
 て無きも高德が使者来りて企ての様を申しなれむ
 義助大ひよ喜び與し其期を約を期し先だつ一夜則
 ち四月十七日の夜半過るころ高德ハ父範長と已か
 館に火を放ちて熊坂より上り僅し二十五騎にて打出

乃る国を隔て境を阻てたる族人等ハ事の急なるを
以て聚むる及を只近辺の一族等ハ事の子細を
告たうをれを今木大富和田射越原松崎等の人々取
物も取りしを馳付りて問其勢漸く二百余騎も成よ
り彼是るまうち夏の夜早くも明ぬれを思ふも違
へを賊軍ハ聞より兵三千と今ちて攻寄たり其の態
山ハ高さハ比叡山のぞくよして四方も七條の道
り其路何れも麓ハ少し険しけれと峯ハ平らなり
て平地も等し高徳僅の勢と七道も分ちて攻上る敵

を防ぎつ追下せば攻上り攻上れば追下し終日戦ひ
暮して態と時を移しる日既も暮るる時賊の一
軍二百騎をうり思ひも寄ぬ方より抜入て動と聞と
揚て攻寄せたり高徳七方の麓へ兵と分ち僅も十四
五騎もて本堂の庭も磬へたりい今去の休も驚く
りのの賊軍の中も懸入々々火花と散りて戦ひ
うち深山の木隠し月暗く敵の撃つ太刀分明あり
高徳ハ内甲と突きて馬より堂と落まりり透さむ
馳寄る賊四五騎頭と搔んと競ひ蒐るいとを危う

其折ありて児島が一族松崎和田の両騎迅くも其場へ
 馳合せ漸く敵を追はらひ倒れ伏たる高德とやを
 馬も扶け乗せ本堂の椽も下り種々介抱るをその
 のり餘程の重傷も堪むやありん目昏れ魂も消え
 暫く絶入りたり我父範長枕の下も差寄て声荒らげて
 云へるやう往昔鎌倉の権五郎に敵も左の眼も射抜
 と三日三夜その矢も抜て當の敵も射留いとあそ云
 傳へたれ憊る些々たる小疵も弱りて死ぬるといふ
 事やらるべき夫程云甲斐なき心と以て此一大事と

思ひ立ち多ると勵り立ち父が詞も高德忽ち蕪生て
 岸破と跳起き奮然と我と馬も昇乗よ今一戦争と
 敵も蹴散さんと終も奮撃賊兵と走らる而して義助
 軍も潜りて間道より賊の背後も出で前後よりして
 夾も撃ち遂も舟坂も抜き進んで福山の城も抑る賊
 將赤松則村使者と馳て尊氏も告て曰く官軍山陽道
 も克満ると雖も皆氣疲と糧尽たる時節もれば今
 此時も當り將軍の大軍上洛もなるとなへ下支えも味
 へまド白旗の城陥らば九州の咽喉も敵も遮られ將

のうあつふこ
 範長我子
 まのう
 高德の
 ふらで
 深痕と
 えん
 励まき



軍兵ありとを用ゆる所ありざるを天下の成功只
 この一挙より疾々上洛せしれよとのみよ尊氏を
 の議より従ひ乃ち大挙して東上を水陸並び進む其
 勢ひ天を掩ひ地を捲き長鯨の百川を吸がごとく駭
 くもまゝ恐ろしく福山の官軍あれと聞て恐怖れ戦
 をして潰へ走る義助倉惶兵を引退、賊の舟師
 上陸して西川尻に陣を高德よと聞き義助の軍よ
 合し山を踰て東に而して賊軍の先途を要撃せんと
 一族郎黨八十餘人道を急ぎて馳行しが高德熊山の戦

争ふ負たる疵の刺しく痛と殊に堪がごとくをや一歩
 も進む能はざる範長則ち掉越(地名)の邊りよ知己の僧
 のありける紙尋ね出して高德を預けおた其身ハ敗
 兵と従へく落て行衛も定めおた心の内を哀れらる
 乱離の世とて浅き一きは是や親子が生別死別と知る
 やあらむおやあらしまろ子と棄て親よ別と路の東と指
 て走りゆく此時義貞己よ白旗の圍を解し赤松
 が兵三百余騎範長の過ると見て迅くも官軍と悟る
 めぞ声々よ呼りつるやう落武者と見るハ誰人を余惜

くはちと外一甲と釋て降るべしと範長あきと聞て
 呵々と打笑ひ聞も習えぬ詞くる尊氏百方我と招ぎ
 一時まらその書を毀ちて燒棄たりき今曷ぞ汝等
 降るべき益あはれ口と叩らんら道を開いと通され
 よと言際馬は鞭ちて八十三騎一同は敵陣は突いて
 入り奮撃尖戦せざるを多く三百余騎と懸散し忽ち
 一方の血路を開きて難多く田を斬抜つ濱路と東
 へを落ゆたりる賊軍四方は傳呼して落武者の過る
 由と告たりりれを二三千の土兵此処彼処は蜂起し

道と遮り速矢は懸け我撃取んと競ひ蒐るを物と毛
 せざる範長主從馳散し踏散し十八度まで田を突し
 衆寡敵せざ今もや從ぐ人者僅は六騎今ハ斯と
 と思ひらん範長徐に馬より下り道の傍は荒果たる
 迂堂の椽は腰うち掛け從兵は向ひて去へるやう適
 是一族ごと打連て来りまば不覺に取るまトき又悔
 んを尚餘りありまや此上も是非もるし只潔よく
 死し後忠義の鬼とあらんのみと言ひ引抜く氷の
 又左の股腹は苦嗟と突立て前は伏てぞ死たりる

此と見るより従兵等も吾後且トと諸共と刺違へそ
 倒るり自ら首刎と果るるあり同ト枕と斃れ伏
 老勇士の最期を目醒しき去程は賊軍のよりくまなく
 勝り乗り東を指てぞ攻上る義貞兵庫に陣ト書と飛
 して危急の由を朝廷に奏聞ありこれを京師の騷動
 下方あり此時ふ當りく北畠顯家へ東北鎮撫の
 守護職としそ陸奥より下り京師守衛の兵寡る一主上
 大ひに震襟と惱せし是正成を召し急ぎ兵庫より下
 りて義貞を援け賊を防ぐる一と命ぜられれる正成

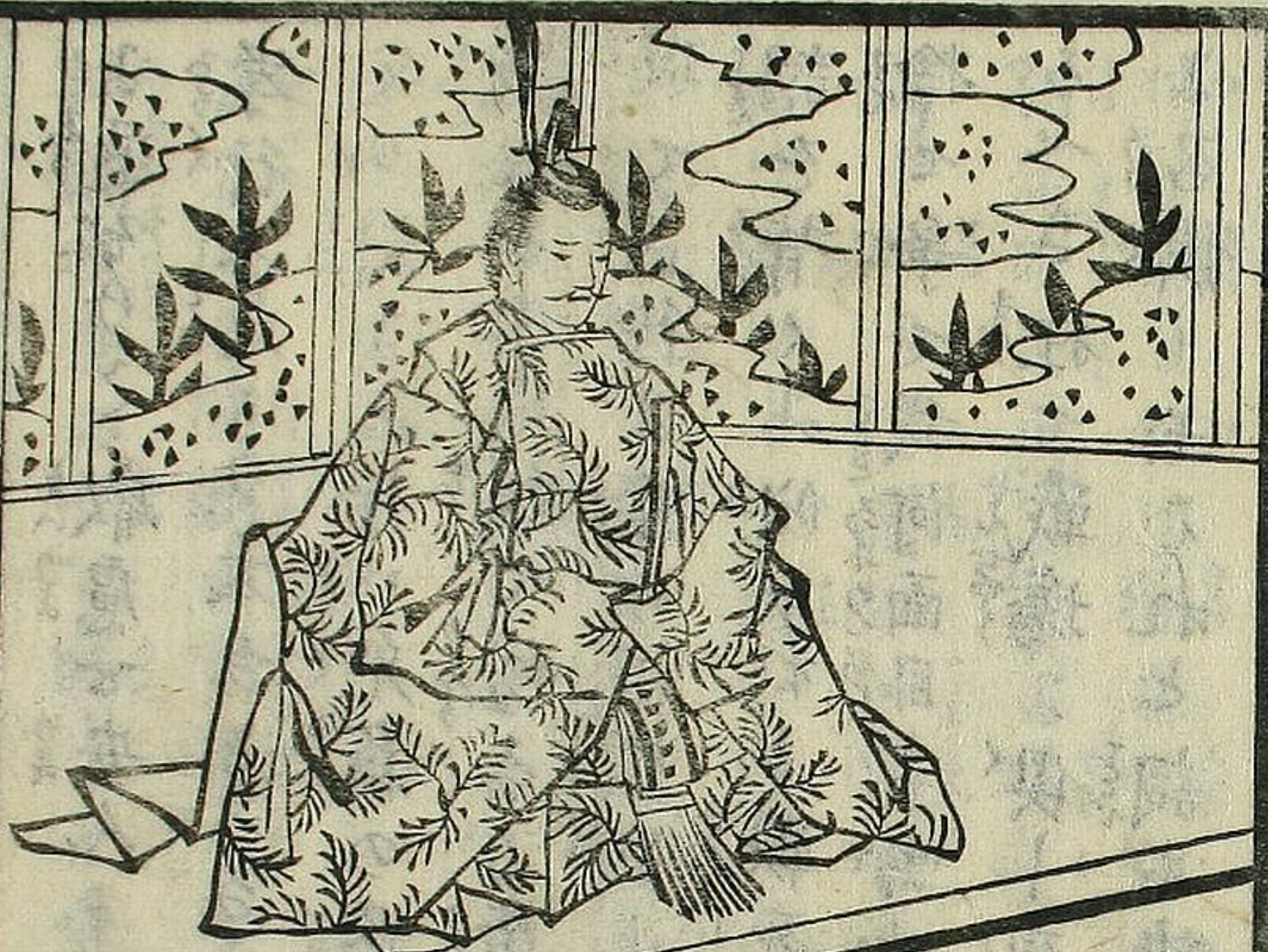
謹んで奏して曰く尊氏新に九国の兵を率て来る
 その鋒先極めし鏡一御方の疲しと小勢と以て機
 り乗りたる敵軍と格闘えし他の荷道もくをその敷
 与んと必しり今の計策と為さんみ陛下復獻山と
 行幸し玉ひ義貞を召還され賊を縦ちて京師に入
 是而して臣も河内より帰り幾内の兵を以て河尻口
 塞ぎ賊の糧道と絶切しば賊兵日散下我兵日集
 合して前後より夾きみ撃べ一挙して朝敵と亡び

登一戦うひの道一多を逃るも避るも耻多足ら
 必要なる所を勝し歸を願く朝廷あまを再議せし
 事んし成と思ひ入るを申しし誠軍旅のし兵
 譲られよと諸卿各々僉議あり主上も正成が建策
 多を悉く點頭たまひし稍従はんとして玉ひ一時坐右
 待りし參議藤原清忠進み出マ座中を見廻し正成
 が云ふ所道理ありしゆ縁ども征討の為下さ
 見ざる節度使の未ど一戦とを為さる先帝都を捨
 て一年の内二度まで山門へ臨幸ありん事一ハ帝

位の軽きよ似て一官軍の道と失ふ也止を得
 るの時是非なるれど賊軍いの程強盛なりと去
 年尊氏坂東八箇國の兵と従へ上りと此の猛勢
 ハよも過たる事ありし然れば只戦いと帝都の外
 又決して敵と鉄鉞の下に亡ぶさん事何の子細り候
 らん多んと憚る色なく述べられし主上もあの議と
 取りたまひ只此上へ時と替む正成罷り下るべしと
 勅裁ありけれ正成是非なく退朝し其子弟も云る
 やう事既し此に至る抗議あるを益かしくと翼を

五月十六日弟正季子正行等を率ゐて京師を打立ち
 五百余騎よて兵庫をさしと下られりる道櫻井の驛
 に至る正行時年十一正成思ふ昔らうて河内へ返
 遣をまるとく庭訓を遺しりる獅子兒と産て三日
 と経るに數千丈の石壁より蹴落し強弱如何を試む
 るよ其子獅子の機分あれば教えざるよ中より駈返
 りて死をる事と得おと云り子と見ると親よ如お汝
 幼るよと虽も既よ十歳と過ぐ尚能吾言を記聽しと
 忘る勿れを今日の合戦ハ天下の安危決まる処実

よ危急存亡の秋と思ふうろ今生りて汝が顔と見ん
 と今と限りと思ふる吾既よ戦死と聞べ則ち天
 下へ盡く足利氏よ帰し芳野の山の奥深く慮と惱
 まし奉らんを鏡よ懸けて見るよと左へ去るがう正
 行よ暫一の難と逃し人と利よ嚮ひ義を忘れず張月の
 影暗く家名と汚まると勿れ撃洩されし一族郎黨一人
 たるとも生延らんと在ん程に金剛山の旧趾よ扱
 身と以て国よ殉し命と養由か矢先よ懸け義と紀信
 が忠よ比し流し尽せぬ菊水の旗と翻し再び敵と千里



良將の建築長
 袖の腐門ふらどは妨さまた
 げられ遂ついには戦いくさ
 期きと失うしなを

九編上
 九編下

十六



九編上
 九編下

十七

み退ぢけく 歡慮と安んト奉つ是是汝が吾も報るの
孝行又是より大なるるへるいと公私を分ちて教え諭を
父が詞も正行の兎角の返辞もあつるく涙ぞ人の
誠るる正成傾て傍るる帝も嘗て賜ふ所の寶刀と
取て正行も授け一訣別を正行漸やく顔と拳げ父の
詞を背くみ似されど戦死と思ひ決めらるし親と見
捨て争で我何面目も嗚呼々々と故郷へ去るへ歸ら
るべき枉て戦場も俱一死るバ諸共何処も是非
よ召俱一玉られと詞も雄々一き健氣の形況見るよ

付け聞よ付け猛き心も骨肉の情義も羈する生別死
別流石忠義の正成も堰来る涙を眼瞼で押へ齒と切
なる切なき思ひ心弱くて叶へどと態と怒りの声荒
らげ女々一き事とりふその哉思ふ仔細のわれを去
そ斯ハ汝と返きあり只徒らよ汝が命と助けんとく
故郷へ返き事やろるまき斯きを言も尚聞る疾々
行けと堰立ち父が詞も正行は是非もあつく起上り
涙呑込と故郷の空懐りまき別路も血を吐く思ひ
杜鵑我身の心と察してや不如帰と啼叫ぶその一声

日本書紀 卷之九 九十九
二十
み送られく河内と指て帰り行く心のうちぞ哀れなる
往昔の百里奚の穆公晋國を伐し時戦ひの敗る
と暨して其將孟明視を向ひ今と限りの別と悲し
と當時の楠正成を賊軍京師の西に近づくと聞き国
必を亡びんと成患ひてその子正行を遺訓して亡き
跡までを羨と全くと彼を異国の良弼あり此を我
国の忠臣義子時千載を隔つと虽も其事其实粗相似
たり現を得難き賢佐ある哉正成乃ち兵庫に至り美
貞と援け朝議の模様と建策の次第と告ぐ美貞曰く

敗卒と驅て銳師に當る吾その必を敗ると知る然
りと虽も去歲を関東の戦ひに敗れを取り今も一
城ぞを援むと此は京師に入んると餘りも言甲斐
なく人の誹謗も影護し只去の上を潔よく戦死せん
と思ふのみ覺悟決めて候らむと數回嗟嘆し他
事なく云へば正成も現に道理と思ふのうら詞と
和らげ云へるやう衆愚の器々々の一賢の唯々
に如ぞ知る人ぞ知る閣下の功業進退宜しきに従ふ
こそ良將とを申さるれ閣下宜しく自愛して前途の

事と計られよ軽躁の拳動りるるるる前よの逆賊高
 時と誅し後よの朝敵尊氏と西海よ退ぞりれ其功その
 業極めて大あり衆愚の囂々たる左のみ心よ懸たまふ
 ると慰さめられて義貞へ稍愁への眉と開き顔色解
 て通夜国事と談トて傾くる孟の敷を重なりて軍旅
 の憂とぞ慰さめける是れ美貞正成が一世の別
 ありとありと後よを思ひ合されり去程よ翌とば五
 月二十五日澳の霞の晴間より幽し見ゆるその船を
 いさりよ帰る海人が淡路の迫戸と航る船をさる

ちりぬら雲波渺々汐路遙し見渡せを水や天なる青
 一髪艦船よ旗を立さる兵艦その数幾萬あると知ら
 らぬ順風よ真帆揚げ一瞬千里海面十四五里が程よ漕
 連絡て舩と舩り艦船と併べられを海上俄りよ陸地
 とありて帆影よ見ゆる山ゆるりる夥しよ一吳魏
 天下と争をひし赤壁の戦争大元宋朝と亡不せし黄
 河の兵も是よの過トと思へとさる又陸軍へ旌旗天
 と掩ふをりや颶風地と捲くの勢ひ鋭どく雲霞のど
 くよ押寄り思ひよる夥しき賊軍水陸よ克満

一撃へき隙もあらず多く大敵と見て恐るる智
 あり勇る義貞正成騒ぎたる気色もみく徐よ將士
 と部署して各々要所に向へし義貞親う諸軍よ
 將と一水軍よ當らんとて和田ヶ崎よ軍を正成僅よ
 手勢七百騎と率めく湊川よ陣一以て賊の陸軍五十
 万よ當る賊の總軍七十万と称せ而して官軍八十万
 よ満ぶその衆寡と比ぶる時へ現よ九牛の一毛大洋
 の一滴も帝るるぞ勝敗の如何も概して知るを一既
 よ賊の水軍磯近く漕寄とべ陸軍もまた旗と進めて

水陸齊しく押寄り官軍も同トく兵と進め西軍互
 ひよ相持して動と鯨波とぞ拳りり其声南と淡
 路鳴戸の澳西々播磨路須磨の浦東へ摂津国生田の
 森數百里外よ響き渡り々天維もあまが為よ挫け坤
 軸もこれが為よ傾むくりと疑ぐみ計り現よ凄まじ
 き景況なり憐る処よ美貞の軍中より花美よ鎧ふと
 ろ一個の騎馬武者弓矢携さへ徐々と和田の御崎の
 浪打際よ馬乗出つ賊船よ向ひく大音挙げ敵の船よ
 物申さん這回將軍筑紫より遙々御上洛の事も多よ

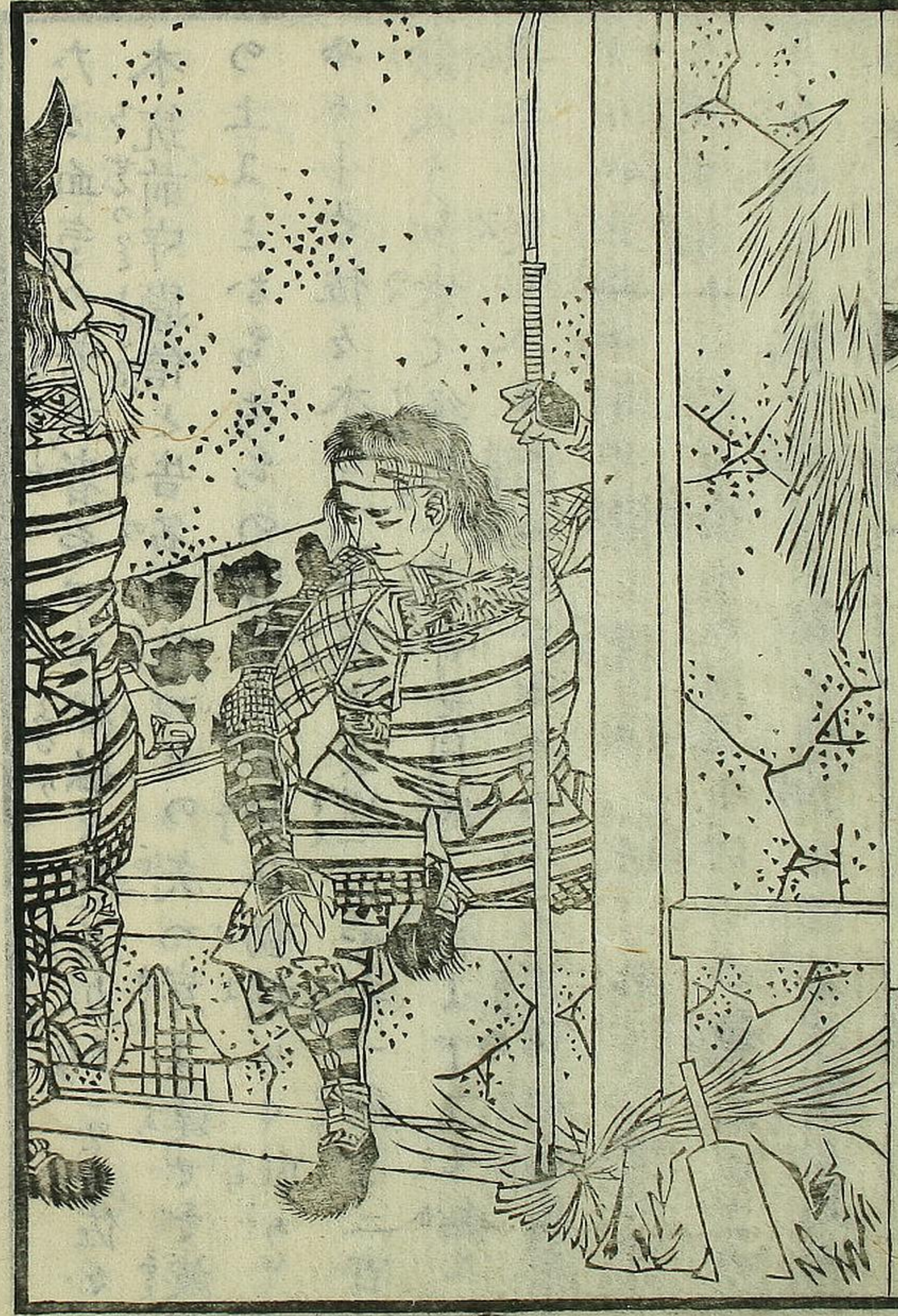
鞆尾の道の遊妓等と定めて多く召具したまひ軍旅
 の鬱と慰めんと酒宴央と覚えられ御者一ツ参らせん
 疾か受取候らくと二たび三たび呼らうく上差の征箭
 引抜つ二所藤の弓は取副へ小松の陰は馬と乗寄せ
 波の上より水鴈の己が影る魚と驚らう飛さぐる
 程をぞ待らうける時水鴈の天高く飛揚るよと見
 る間波の上は落下りて二尺をりる魚の鱗を啄
 らみ澳の方へ飛行り多彼騎馬武者疾参らせんと言
 まし又馬は一鞭加えり小松原の陰より一く墓地倉は

馳出—追様より多のくけ鳥を射たりり態と生
 むぐろ射て落さんと片羽翼を射切りのみ中心を射
 ざらが故は鳥は魚を啄むみ—敵の舟中へ射落し
 たり射手誰と知らざれど此有様は誰か一人驚嘆
 せざる者あるべき賊の船七千餘艘舷を叩き楯を鳴
 一御方の官軍五萬餘騎は水汀は馬を乗出し嗚呼射
 たりや射らうと感る声天は響き地は震き暫らく
 鳴り止まむ尊氏その射術と感し人をして其名を
 問へむ彼の騎馬武者答へて曰く物數るるぬ某也

名告るも絶て無益一これど乞るまき名刺を呈
 せん受取たき人と言ひて復さび弓よ矢交へ之満
 月の如くひた絞り票フツと射て放てを其矢遙りよ
 六町余と超て尊氏ガ船舷を貫ぬたりかろ稀代の
 弓勢よ賊軍何とも舌と捲膽液冷して嘆賞一尊氏そ
 の箭と聞かれ相摸人本間孫四郎資氏と小刀の先
 よ書たりろ資氏扇と颯と開き澳の方とさ一招き
 方今戦國の事るとば矢一筋ぞを惜むべ一其矢此方
 へ射返してさび候らんと呼る声よ賊軍も堪る

たる血氣の若武者やがて船舷よ起上り自うろ佐々
 木筑前守顯信と告名り放つその矢へ岸よ達せを波
 の上よとかちあちの官軍吐と笑ひ動揺めく耻う
 やろ一と佐々木の一軍怒りよ堪ぬや船一艘よ二百
 餘人うち乗て経島へ漕寄せ同時よ磯よ下立て無二
 無三よ突て入る待設けたる六の隊の官軍殿屋義助
 か五百餘騎来とや應と渡り合ひ暫一戦うふその中
 よ賊軍忽ち利と失るひ一人も残らぬ撃れよこれ
 を乗捨たる船へ徒らよ岸うつ浪よ漂えり斯と見る

正成 兄弟
湊川 戦死



日本書紀 卷之九

日本書紀 卷之九

たり賊の先鋒七百餘艘紺部の濱より上陸せんとて
 磯に沿てを漕上るさをもさせと官軍の五万余騎ハ
 漕行く船に隨がひ汀と東へ馳行る間賊の水軍ハ自
 う進むが如く陸路の官軍ハ偏に逃て走るが如く
 水陸の兩軍互ひに相窺ふと遙の汀に着て上りしれバ
 新田の軍と捕の勢と距離遠く隔たりと兵庫の港に
 へまゝ官軍一人も入りし隙を得たると賊の全軍
 六千餘艘和田の御寄に漕寄せ難らく陸へぞ上り
 たり是に至りし官軍の難美りしをくもろしを正成

顧とて弟正季と謂て曰く敵我前後を遮り御方へ遠
 く隔たりしを今へちや是迄あり疾や此世の思ひ出
 ん花々一き戦ひに前なる敵と突破り而して後背後
 の敵に當らん正季曰く諾是に於て正成兄弟七百餘
 騎と前後よ立て群がる賊軍の中央へ面も振を突入
 たり直義の軍勢菊水の旗と見るよりも素破好敵手
 ござんるを我撃取らんと衆めき合ひお竹取込りて
 競ひ蒐ると物とをせざる正成兄弟豫て期しとる一期
 の浮沈只よの一戦にありしを追つ返しつ入乱と

敵ら味方ら味方ら敵ら東より西へうち破り北より南
 へ追靡け奮撃突戦せざるもなく又尖より火出るまを
 のとも烈しき修羅の街み兄弟の肉う見失るひ正成
 と正季と七度合し七度離れ争ひ直義と獲んと欲
 を其猛勢飢たる虎の群がる羊と驅るごとく直義が五
 十萬騎も捕ら七百余騎もうち破られ西の方へぞ引
 返る直義が乗たる馬矢尻と蹄も踏立く前足折て倒
 る機会主さん鞍も餘されと頭轉倒と落馬るを獲
 得たりと逼撃る官軍へ迅くも傍り馳集まり獲物々

を振發し只下撃と競ひかゝるゆゑも危急きその折ら
 ら賊の一將薬師寺某撃んと競ふ官軍と遮り闘ふ
 その間も直義辛くも田を切抜け漸やくよーて落
 延ぬ直義が軍敗れよれを尊氏より兵と分ちて来
 り援け湊川の東に馳出で官軍の背後を包む正成兄
 弟斯と見て馬の蹄と立直り取て返りつ渡り合ふ血
 戦十六合尽く其騎と亡るひ撃残されたる者と數ふ
 れば僅に七十三騎もぞありよるかる小勢あるとべ
 とて田を突て落延んあゝ難き業もを非されど正

成京師と出—より世の中の事へ是まをあり豫てよ
 り戦死と覚悟決め—丈夫の今更長生べくをわらむ
 左もとて湊川の北に當る百姓家み走り入り座—
 て鎧と解べ身十一瘡と蒙あり鮮血淋漓肌液浸
 —威の糸も緋威—と染たりたまの唐紅ひ甲由い
 つの振落—おどろよ乱を黒髪の顔よかろ毛妻ま
 —く七十二人の一族郎黨孰も五箇所三箇所の
 疵と負ぬへるうらるる六間餘りの客殿よ一同二行
 よ並び居て正成上坐よ威儀と正—弟正季を見顧り

て如何よ正季人も最期の一念よ依りて善悪の生と
 引くとう云へり死—て後九畧の間よ足下も何と望
 とたまふをと問をれく正季莞爾と笑く我が願ひハ
 外ありむ死—て忠義の鬼とまり生て七度まで
 も人間よ生後得て国賊と亡がさんと存ト候らんと
 雄々—き詞よ正成も欣然と—て云へるやう世よ頼
 母—き足下の一言我も斯くを思ふる疾去らむ兄
 弟同トく生と替へてあの本懐と達せんと契りの手
 よ手と取換—兄弟共よ刺違へ同ト枕よ卧—みり

正成時とらは四十三宗族そらぞく十六人とら従士とら五十余人とら悉くとらおれよ
 死しを此日このひ菊池武重きくちたかむねへ義貞よしかげの軍えに在りあて弟武吉あにむかひと
 一ひとて来りきて湊川みなとがわの戦状いくさぶらひを見せみて武吉むかひ湊川みなとがわに来きて
 視みると正成とら自殺じこくの折をりありありたり此体このていを見てみて去さるるよ忍しの
 びを共ともよ自殺じこくして果はよける

通日本小史九編卷之上終

010190512997

